戦没画学生の絵が語りかける～ 無言館館主 窪島誠一郎さんに聞く

真田幸村ゆかりの長野県上田市にある戦没画学生慰霊美術館「無言館」。15年戦争の戦火に散った画学生たちの遺作を収集・展示・保存する美術館だ。無言館館主・窪島誠一郎さん（74）に聞いた。

くぼしま・せいいちろう　1941年東京生まれ。上田市在住。小劇場「キッド・アイラック・アート・ホール」、美術館「信濃デッサン館」・「無言館」の各館主。印刷工、酒場経営などを経て、64年、「キッド・アイラック・アート・ホール」を設立。79年、「信濃デッサン館」を開館。97年、「無言館」を設立。2005年、「９条美術の会」の発起人の一人に。実父は作家・水上勉氏。『無言館ノオト―戦没画学生へのレクイエム』『天折画家ノオト　20世紀日本の若き芸術家たち』『父・水上勉』『最期の絵絶筆をめぐる旅』など著書多数。

伊澤洋「家族」（油彩／キャンバス）出征前に空想で描いたもの。貧しかった伊澤家では庭のケヤキを切って洋の入学費にあてたという。享年26歳。

描きたいという声聞こえる

コンクリート打ちっ放し、簡素な平屋づくりの無言館。重い扉を押しあけると、薄暗い館内を静寂が包む。

画学生たちが描いたのは、ありふれた日常の光景ばかりだ。妻や恋人、兄妹といった身近な人びとや、故郷の風景などだ。

東京美術学校（現東京芸大）で学び、ニューギニアで戦死した伊澤洋の「家族」＝写真＝や、フィリピン・ルソン島で没した山之井龍朗が弟俊朗と合作した「少女」＝写真＝もそうした作品だ。出征の数時間前まで、絵筆を手にし、戦地で異国の景色をスケッチし続けた者もいた。

「発展途上の未熟な絵ですが、『描きたい』という声が聞こえてくる。絵を描いているだけで〝非国民〟と非難された時代。絵筆を置いて、戦地へ送られるという不条理を前にしても、自己表現する喜びを失わなかった若者の息吹がある」

無言館を訪れる若者たちがこんな感想文をノートに記す。「もっと家族を大事にしようと思った」「自分は真剣に音楽をやっているのだろうか」と。

「彼らの絵を前にすると、人間が好きなことに熱中できる世の中を大事にしようと思う。だから平和は尊いのだと。そして、自分はどう生きているのかと」

押しやってきた戦後を自分に引き寄せた

2歳で靴修理職人夫婦の養子となった窪島さんは、4歳で終戦を迎える。子どもの頃から図画や作文が好きで、「将来は画家になりたかった」ほど。

家は貧しく高校進学後は、ホテルや喫茶店でアルバイトに明け暮れた。21歳で明大前で始めたスナックが大繁盛した。一日の売り上げが勤めていた頃の4カ月分にもなった。

「泰平享楽に酔いしれ、戦争のセの字も考えないで、物カネだけを追いかける飽食ノーテンキ男だった」

水商売をたたみ、画廊経営などを経て、村山槐多や関根正二など、夭逝の画家たちのデッサンをコレクションした「信濃デッサン館」を1979年、上田市に建設。

その後、画学生として出征体験を持つ画家の野見山暁治氏との出会いが「無言館」建設のきっかけに。北は北海道から南は種子島まで3年半で87人の遺族を訪ね歩くうち、「低温やけど」のような戦時中のかすかな記憶を呼び起こす。「遠くへ押しやってきた〝戦後〟を自分の手に引き寄せることになった。彼らの絵がもう一人の自分を見出してくれた」

焼夷弾が降る中を子どもを背負って逃げた、養父母の苦労や愛情、戦時中の貧苦の中で子どもを手放した実父母のことに、想いを馳せた。

人間の素晴らしさ伝えたい

山之井龍朗・俊朗合作「少女」（油彩／板）兄龍朗が応召する前に、弟俊朗といっしょに描いた。龍朗は享年24歳。俊朗は享年21歳。

被災者が生きていこうと思った

東日本大震災から1年後の2012年3月、宮城県石巻市で東北出身の画学生の絵を中心にした無言館展を無料で開いた。

「画学生の絵が被災した方々の何の慰めになるのか。そんな気持ちもあった」

だが、津波で1人娘と両親を亡くし、自宅も工場も失ったという水産加工会社の経営者が受付で窪島さんにこんな言葉をかける。

「私は、絵を見るような人間ではないのですが、今日、彼らの絵を見て生きていく気になりました」

窪島さんは無言館のもう一つの役割に気付かされたという。

「画学生たちは国の命令で〝戦争という津波〟に向かわされた人たちでした。震災や原発の被災者も同じ。全てを失い絶望的な状況にある。でも、画学生たちの絵が絶望の中にある人に、『生きてくれ』と声をかけたのでしょう。無言館は、生きる勇気の美術館にもなれるじゃないかと思いました」

来年が開設20周年。これからの無言館の役割を考える。半年前にくも膜下出血で倒れ、一命を取り留めたいまは、「人生のロスタイム」と笑う。

「人間はどんな窮地にあっても絵を描ける、歌を歌える、言葉がある。そんな人間の素晴らしさを伝える美術館になれば」

無言館第二展示館「傷ついた画布のドーム」前で新聞部員と

「無言館」本館・第二展示館
1997年、「信濃デッサン館」の分館として本館建設。2008年、無言館第二展示館「傷ついた画布のドーム」を開設。これまでに全国から、およそ130人の700点あまりを収集。第二展示館には窪島氏の蔵書を収めた図書館を併設している。長野県上田市古安曽山王山3462。営業時間は９時～17時。問い合わせ0268-37-1650。入館料：一般1000円。

絵が放つ無言の力

新聞部・谷　聰

戦死または戦病死した美大生の作品は、遺族や恋人が大切に保管していたものだ。戦後の長期間、個人で保管するのは大変なこともあっただろう。中には、絵の具が剥落した作品もある。

戦地で書く時間も、道具もない中、とにかく書きたい、裏紙、端切れだろうが絵の具が無ければ鉛筆でも書く、また出征する前に書きたいという気持ちがすごく出ている。

個々の作品の芸術価値とは関係なく、作品が館内に並べられると無言の圧力感を放つように感じた。

信州の山の中腹にある本館近辺の風景は絶品だ。信州に行かれるときは寄っていただきたい。

生きる喜び描いた

新聞部・伊津進弘

上田駅からローカル線とバスを乗り継ぎ30分余りで、無言館のある高台だ。眼下には牧歌的な景色が一望できる。窪島館主が「自問坂」と名付けた木々に囲まれた山道を登ること数分、無言館は緑の中で静謐な雰囲気を醸しだしている。

展示品は画学生が、避けられない死を覚悟し、束の間の生きる喜びをキャンバスに描いたものだ。理不尽な死を強制されても生に執着し、自分の足跡を表現するかのように。

画学生や遺族の叫びが耳に届き、沈痛な思いにさせられる。これが「無言館」ということだろう。